

る。

(ホ) 基盤層(暗黄褐、暗茶褐) 本層は当地区一帯に広く発達する嘉穂

型黒雲母花崗岩で、当地では強風化帯を形成し、マサ土となる。

分布は深度四・九〜六・八層以深に存在する。当地の基盤岩は、全体に風化して粗粒状を示し岩質的には脆く指で潰すと石英以外は容易に碎ける程度である。深度が漸増することに地耐力的、支持力的に十分安定した地盤となる。

※本町南部帆柱地区野峠附近に材木石類の柱状が見られる。また下伊良原地区の石炭層等は特質の一例である。

第二節 河川と池沼

一 河 川

町の北部を流れる今川と、南西部より北東へ流れる祓川の二つの水系があり、いずれも豊津町、行橋平野を経て周防灘に注いでいる。この川を本川として、四六本の支川が流れており、流路が短く、それだけ勾配が急で、流れが速いのが特徴で、大雨が降るとすぐに洪水となって水かさが増し、水害を起こす暴れ川になりやすい自然性を備えている。

昭和二十年代には年々大災害に見舞われていたが、徹底した防災事業により改修工事が進捗した。その後昭和五十五年に大災害を受け祓川水系上流に被害が集中する。現在、今川上流に多目的油木ダムが昭和四十六年に建設されている(有効貯水量一七四五万ト)。河川の表流水は、ほ

第4表 今川水系の支川

No.	河 川 名			延 長 km	流域面積 平方km	備 考
1	松	坂	川	0.4	0.40	松坂
2	浦	谷	川	0.7	1.32	大坂
3	砂	場	川	1.7	3.08	〃
4	谷	山	川	1.0	0.71	〃
5	中	平	川	0.3	0.65	〃
6	山	神	川	0.4	0.12	〃
7	田	原	川	1.0	0.85	山崎
8	峠		川	1.6	1.76	喜多良
9	喜	多 良	川	4.0	7.17	〃
10	目	迫	川	2.9	1.59	久富
11	末	江	川	3.0	2.21	末江
12	西	河 内	川	1.5	1.64	上高屋
13	高	河 屋	川	1.4	1.01	〃
	(中	河 内	川	(1.4)	(1.01)	
14	天	ケ 谷	川	2.4	1.62	蔵持

とんど灌漑用水に利用され、生活用水は、井戸水やボリングによる地下水の利用が多い。環境汚染の問題や生活様式の変化に伴い、今後水利用の、体系的な整備と河川環境の将来を考え、よりよい河川を生み出す計画づくりと、河川愛護の活動を徹底したいものである。次に今川上流の油木ダムと祓川上流の伊良原ダムの概要について述べる。

(一) 油木ダム

今川総合開発事業の根幹である油木ダムは、二級河川今川水系今川に洪水調節、灌漑、水道、工業用水の供給を目的とし調査以来約九か年の

歳月と五八億円の事業費をもって建設された多目的ダムである。今川は福岡県の最高峰一九九・六歳の英彦山に源を発し、田川郡から京都郡の犀川町、豊津町並びに行橋市を貫流して、周防灘に注ぐ、流路延長三八・七キロ、流域面積一二〇平方キロの河川である。本河川の流況は、その流路延長は短く、特に上流部においては河床勾配が甚だ急で梅雨期はもちろん、台風襲来期には毎年のように洪水に見舞われる。またその反面に灌漑期には用水の不足を来し、度々深刻な旱害を被っている。一方、利水面から見ると、北九州市並びに京都郡地区は年々飛躍的発展の段階にあり、人口増加、工業の発展により、飲料水、工業用水の不足は甚だしく、用水の確保が問題となっている。このような情勢のもとに、治水、利水の観点から、油木ダムを計画し、昭和三十八年に実施調査に入り、昭和四十四年九月からダム本体コンクリート投設を開始し、昭和四十六年十一月に竣工したものである。

油木ダムの下流地域への警報体制は、ダム地点から行橋市までの二七キロの区域に一六局の警報局、三〇か所の警報板を設置し、放流の警

報を行っている。ダムからの放流を開始するに際しての放流情報は、放流開始時刻、放流量、その他必要事項を電話により関係機関（関係土木事務所、市町村役場、警察署、消防署）等に通知し、各放流警報局は無線操作により、サイレン吹鳴、放流表示板及び赤色回転灯の表示に引き続き拡声機により放流開始時刻、放流量、その他放流情報の放送を行うとともにこれと並行して警報車を巡回させ拡声機により放流情報を放送し、下流住民への注意を喚起（放流中は川の水位が急激に上昇することがあり厳

第5表 祇川水系の支川

No.	河川名	延長 km	流域面積 平方km	備考
15	味噌ヶ谷川	1.3	1.83	下木井
16	犬丸川	0.9	0.47	犬丸
17	馬場川	0.9	0.32	横瀬
18	犬ヶ河内川	1.3	0.56	〃
19	蔵持川	1.4	1.10	下伊良原 (高座)
20	釜ノ河内川	1.6	2.24	〃 (釜の河内)
21	竹ノ畑川	0.9	0.51	〃 (竹ノ畑)
22	宮園川	0.9	0.42	〃 (東講)
23	堂園川	0.7	0.33	〃 (原)
24	岩屋河内川	2.1	2.65	〃 (岩屋河内)
25	向河内川	0.7	0.22	〃 (農協前)
26	善治河内川	1.3	0.93	上伊良原 (向河内)
27	原河内川	1.4	1.36	〃 (中村)
28	善治河内川	1.4	1.04	〃 (中学校手前)
29	善治河内川	2.1	1.09	〃 (古谷河内)
30	善治河内川	0.9	0.18	〃 (川久保)
31	藤神川	0.8	0.18	〃 (藤神)
32	寺河内川	1.6	3.11	〃 (鳥越)
33	宇土川	0.8	1.02	〃 (柿尾)
34	鱒淵川	0.8	0.69	〃
35	柳ヶ追川	0.8	0.33	〃
36	扇谷川	1.2	1.00	扇谷
37	神丸川	0.7	0.50	〃 (神丸)
38	鋒立川	0.9	0.91	帆柱
39	平市川	1.0	0.83	〃 (平鶴)
40	市鶴場川	1.8	1.96	〃 (市場)
41	高荒越川	1.0	0.60	〃
42	砂越畑川	2.0	2.43	〃 (中屋敷)
43	砂越畑川	1.6	2.03	〃 (杉山)
44	祇川	2.5	5.42	〃
45	祇川	0.4	0.18	〃
46	龍毛川	1.3	7.25	横瀬 (龍毛)
小計		16.8	25.15	
合計		61.3	67.82	

重なる注意が必要)している。また、河川の状況等を把握し、監視局との連絡を密に保ちながら実施している。

(二) 伊良原ダム

祓川は、今川と同じく英彦山に源を発し、本町の南部より北東へ豊津町及び行橋平野を貫流して周防灘に注いでいる。流路延長二八・一四キロメートルで、流域面積七一・二平方キロメートルの二級河川である。

昭和三十五年十月今川・祓川総合開発事業の多目的ダム(洪水調節、灌漑、水道、工業用水の供給)建設の調査について、県知事より協力の要請があり、昭和三十六年に地元説明会が開催され予備調査が開始された。以下にその経過を簡単に述べる。

昭和三十八年より、県は今川上流域に油木ダムの建設に取り組みを始めたために、昭和四十八年まで調査を取りやめていたが、昭和四十九年に県は実施計画調査の採択を受け調査を再開し、地質調査を始め、同時に下伊良原区において下伊良原ダム対策協議会が設立される。同協議会は、その後昭和五十一年五月に下伊良原ダム対策協議会と伊良原ダム対策水没者地権者同盟会に分かれる。ダムサイトの位置が昭和五十九年十二月に下伊良原の高座に決定される。北九州市が昭和六十二年十一月に計画不参加の表明をする。平成元年九月に役場内に伊良原ダム対策室が設置され(職員二人)、同三年六月より職員三人が配置され業務遂行をしている。平成二年に伊良原ダムが建設事業として国の採択を受け、県知事がダム建設の協力依頼のため来町する。再度下伊良原ダムの対策協議会が平成二年五月に次の三つの組織に分かれる。
。下伊良原ダム対策協議会、。下伊良原ダム対策水没者地権者同志協議

会、。広瀬ダム対策協議会

町では平成二年十月に犀川町伊良原ダム水源地域整備連絡研究協議会が、帆柱、扇谷、上伊良原、下伊良原、横瀬区の区長、副区長ほか各団体の代表者一九人で発足する。平成三年三月に京築地区水道企業団(二市五町一村)と、田川地区水道企業団(一市四町)が設立され福岡県と基本協定を締結する。平成三年六月の定例町議会で議員全員による伊良原ダム対策特別委員会が設立される。

伊良原ダムは、平成十二年度完成目標で進んでいる。総事業費五八五億円、重力式コンクリートダム、堤高八〇・〇メートル、堤頂長三四〇・〇メートル、総貯水量二万八七〇〇×一〇立方メートル、有効貯水量二万七五〇〇×一〇立方メートル、集水面積三六・八平方メートル、湛水面積一・二二平方メートルである。

二 池 沼

行橋農林事務所が昭和四十二年に調査した管内の溜池調査台帳によると、犀川町全体の溜池は九五、その総貯水量は二一八万三九八〇立方メートル、灌漑総面積は一七四・一八ヘクタールとなっている。池の築造年次をみると江戸時代二三、明治時代三四、大正時代一二、昭和に入ってから一九、不明七となっている。犀川町分の溜池台帳は次のとおり第6表である。なお、現在における町内の大きな池は次の二つである。

(一) 本 庄 池

町の中心部の高台に周囲四キロメートル、貯水量一五〇万立方メートルの人造湖の犀川公